

愛の便り

校訓: 志が人生を創る

熱中症とコロナ感染に厳重警戒!!



晴れば気温は 30℃超え、雨が降っても不快指数は80を優に超える日が続いています。橘湾から吹き付ける湿った風は何とも体に堪えます。体調はいかがでしょう。

それでも子どもたちは、タオル・水筒片手に元気に生活しています。「元気があれば何でもできる」とは某プロレスラーの言葉ですが、確かにそうとは言え子どもたちは授業中も休み時間も、そして昼休みも元気いっぱい過ごしています。警戒アラート発令時は、校内放送で早めの避難(運動場からの撤退!?)を促すほどです。

また、暑い中ですが駅伝の早朝練習も始まりました。昨年度をさらに上回る50名近くのチャレンジャーたちが集い、練習に励んでいます。来週も暑い日が予想されますので、タオルや水筒、着替え類などいつもより多めに準備させてください。

ただ、やはり気になるのは新型コロナウイルスの感染です。昨日、保健室からのお知らせでも情報を流したところですが、ここにきて徐々に拡大の傾向にあるようです。**元気の源は、何と言っても栄養と休養(睡眠)**です。免疫力を高めてウイルスに感染する隙を与えないことが何よりです。明日から3連休。このことを念頭に置きつつ熱中症にも気をつけながら、1学期最後の一週間を過ごしてほしいと思います。仮に感染しても個々で症状が違うようですので、いつもと違う症状が出たら無理をせず、自宅休養か病院受診をお願いします。



教育週間での授業の内容から

先週の教育週間では、たくさんのご来校ありがとうございました。保護者の来校に加え、今年度は地域の方々を含め外部からの参観もあり、延べ75名のご来校をいただきました。保護者の参観・来校に関しては期待を上回る数字ではありませんが、今後も学校行事をはじめ時間の許す限り足を運んでいただければと思います。

さて、今年度も「いのち」をテーマにした教育週間ではありましたが、校長講話では「生きる」(生き方)について話をしました。中学生である以上、「いのち」の大切さに関しては常識的な認識はできているという前提です。「いのち」について考えること、それは即ち「生きる」ことに直結するものだと信じて疑わない持論でもあります。

ところで、唐突ですが保護者の皆さんにとって「長崎出身の有名な人は?」と聞かれたら誰を挙げますか。実は、7月3日の授業冒頭で子どもたちにも同じ質問をしました。予想通り、まずは『福山雅治』を挙げ、皇后役の『仲里依紗』、続いて『川口春奈』の名前を挙げていました。保護者世代にも共通していることでしょうか。私くらいの世代になるとここに『さだまさし』が割って入るのですが、さすがに子どもたちの口からは出ませんでした。(まさに、ジェネレーションギャップ!?)

雲仙市立愛野中学校 学校便り

令和6年 7月12日

第92号

文責(校長;末永栄喜)



今回の講話(道徳の一斉授業)で題材にしたのは、さだまさしさんのアルバム『夢の轍』に収録されている『償い』という歌詞(歌)でした。ご存知でしょうか。

この歌は、さだまさしさんの知人女性が交通事故で夫を亡くした実話に基づいて書かれています。

【歌のあらすじ】加害者の男性(主人公「ゆうちゃん」)は、毎月僅かずつではあるが賠償金を郵送してきていた。知人女性(被害者の奥さん)は加害者の手書きの文字を見るたびに、事故のことや亡くなった夫のことを思い出してはつらい思いをしていた。事故から数年たってもその送金は続き、知人女性は、「もうお金は送ってくれなくて結構です」と、7年目に初めて加害者に対して返事の手紙を書いた。しかし、被害者の許しの手紙を受け取ったはずの加害者は、償い続けるために翌月以降も送金を続けた、という内容です。

「償う」とは一体何をすることなのか。「許す」という気持ちはどこから生まれ、何を基準に「許された」とされるのか。優しい人々が悲しいまでに織りなす人生模様涙が止まらない実話を歌にしたものです。

人間の弱さや醜さを克服して自分を奮い立たせ、誇りある生き方に近づけることができるように授業を構想したつもりでしたが、果たして子どもたちにその「ねらい」に迫ることはできたでしょうか。

子どもたちのワークシートに目を通すと、「許された・許されていない」を心情円(円グラフ)に書かせたところ様々でした。子どもたちの頭(考え方)や心の持ちようがそのまま割合に表出したというところでしょうか。しばらく、感想を含めてじっくりと読めそうです。

2002年春、ある裁判長の説諭から脚光を浴びた歌であることも有名な話です。命の尊さ、犯した罪への償いを考えさせるため、今でも運転免許更新の際の放映ビデオ内で使われているほか、交通キャンペーンにも使用されているそうです。もしよかったら、ご家族で視聴されてみてください。

実は授業の翌日、七條先生が自宅から絵本を持ってきてくださいました。タイトルは「償い」。歌詞の背景にはゆうちゃんの心象風景がやさしいタッチで描かれていました。

その「あとがき」に、さださんは次のように書いています。

(前略)

当時この話を聞いた時、僕は「人」という生き物の本当のすごさを思った。もしも自分が被害者だったなら、と僕は思う。この奥さんのように「加害者を許す」ような心の広さが自分にあるだろうか、と。また、自分が加害者だったなら、被害者に許してもらえるような誠実な謝罪が本当にできるだろうか、と。

世の中にすごい人と呼ばれる人はたくさんあるが、それはおそらく名前の高さだのお金を持つ量だので計られることが多い。しかし、「無名」と我々が呼ぶ「普通」の人々の中に「本当のすごい人」は無数に存在するのだろうか。人の心はそれほど深く、広く高い。(後略)

